

# さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(14)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさじぶの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

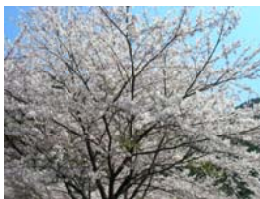
発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571

E-mail :wat@sachihiro.com url :http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

日常生活の中で親神様の息吹を感じ味わうように心掛けることが大事である、と前回「くらしの息吹」の題で述べた。この話は、教理の説明書には余り詳しく説明されないもので、何のことかといぶかしく思われるかも知れない。

親神様のお手入れ(導きのお働き)を頂いて、信仰の先達(せんだつ)に当たる人からお話(「おさとし」)を聞き、親神様の思いやおたすけをわからせてもらうようなことであると言えば、だれでも知っていることである。

お道(天理教)には節(ふし)とか旬(しゅん)という言葉があるが、そのような言葉で言われるような、日常生活の中に親神様のお働きによって何か特別な出来事が起きてくる場合には、「ああ、神様が働いておられる」とわかるが、そうした特別の場合だけでなく、生活の中にも親神様のお働きを感じるように心掛けるのも、大事なことである。



## 「みんなの教理入門」連載・14 ひのきしん

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

天理大学名誉教授・芹澤 茂

このような親神様の息吹に接し、あるいは眼差し(まなざし)を感じるようなときには、だれでも不思議な感動にゆすぶられて、ふだんとは違った喜びを胸の奥に感じるものである。これは「信仰の喜び」と言われる。

この信仰の喜びが胸の奥からあふれてくると、おのずから顔もほころび、うれしくなって体も軽々としてくる。

このようなことは、だれでも体験していることである。

ところが、その次が問題である。これをほっておくと、間もなくまたあと戻りして、もとのようにゆううつな顔つきや、しんどい(つかれた)体になってしまいます。

そこで喜びがあふれて来て顔がほころんだら、ここにこする。何かに声をかけてみる。体が軽くなったら、そこを歩きまわる。このように喜びを態度に現して、喜びが長くようにする。

## 教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
  - 夕づとめ…毎夕・7時00分
  - 元旦祭…1月1日午前0時30分
  - 春季大祭…1月21日午後1時30分
  - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
  - 月次祭…毎月21日午後1時30分
  - 春・秋季霊祭…3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図のMマーク。市立公民館の裏・西側です。



## ■中河大教会少年会おつとめ総会



この時期、各大教会では少年会員のおつとめ総会が開催されます。中河も31日が恒例なっています。

直属の教会毎に模擬店を出します。狭山はいつも「うどん」です。今回も500食を用意しました。と言つても子ども用ですので、半玉です。ビニールの袋ごと包丁で切って使います。うどんのほか、カレー、カニ汁、焼きそば、ちらし寿司、お好み焼き、ホットドッグ、フランクフルト、鶏の唐揚げ、綿菓子、わらび餅、缶ジュースなど多彩な模擬店で、子供たちの旺盛な食欲を満たしました。

## 《編集後記》

▼4月5日、大阪狭山から、吉野経由で熊野へ、国道169号線を通って行ってきました。その間、いつもは変わり映えない山の光景が続くので、いささか退屈な運転となります。▼ところが、今回は、桜の花が退屈気分を一扫してくれました。すばらしい景色に退屈しませんでした。▼帰路は気の赴くまま桜のきれいな箇所まで車を止めてじっくりと堪能しました。池原ダム周辺がすばらしかったですね。2、3ページにその写真を掲載しています。▼この編集後記を書くまで、愛用しているインクジェットプリンタのカラーリッジがあまりにも酷使しすぎたので壊れて、カラー印刷が危ぶまれましたが、新しいのと交換して難なきを…。(わ)

## さちひろ 第36号

編集兼発行人・山口 渡  
平成21年4月8日  
大阪狭山市今熊1丁目1133番地  
TEL・072136512571

得難い不思議な体験が日常生活を陽気にするように働くことになる。このように、信仰の喜びを態度に現すことが大事なので特に「ひのきしん」としてこれを教えられている。

ひのきしんは、「日の寄進」とも書ける言葉で、日々に喜びを捧(ささ)げものを神様に供えることである。特に親神様の働きによって生かされ・たすけられていることを感謝して、その心を形に現す。それゆえ形をみると、色んなひのきしんがある。

「つくし・はこび」と言って神様に心を尽くし・物を運ぶ、参拝し・お供えすることも親神様の話をひとに聞いてもらう「にをいがけ」(匂い掛け)も、広い意味でのひのきしんである。



さらに親神様・おやさまに喜んでもらえるように、人々に奉仕することもひのきしんで、集団的な災害救援の活動などはよく

知られている例である。このため、一般には「勤勞奉仕」と同じものように理解されている。

ひのきしんは、子供でも病人でも、どんな貧しい人でもできるもので、笑顔でひとに接し、感謝のあいさつをすることなど、みなひのきしんになる。「欲を忘れてひのきしん」と言われるように、ひのきしんには損得などの価値判断はないので、「これはひのきしんである」と教えられ、「さあひのきしんしましょう」と言われることに積極的に参加するように心掛けたい。

何事にも喜んでいくという「たんのう」の心を治めることと、いさんで「ひのきしん」をしていくことが、明るく陽気なくらしのご守護(親神のたすけ)を頂き、心もだんだん成人させてもらえる道である。

芹澤 茂(現・天理大学名誉教授)

この記事は、昭和59年に「天理時報」紙に連載されたものです。

### 幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよっとひとこと」

(善本社刊)から

#### 人間とは

利口な猫は、障子を開けるが、閉めることを知らない。犬は尾を振り、餌を食うが、けつして、食べた皿を洗う事がない。つまり、猫や犬は後始末ができない。なぜか、近頃、

自分の行動にも、仕事にも責任をもたず、親や周囲の人に、平気で尻拭いをさせる、非常識な者が増えている。後始末のできない人間は、犬や猫と変わりない。人間とは、いつも責任感を持ち、後始末の出来る者を言う。

## おさしづの点滴 (15)

### かりもの承知。：自由理分からん

めんく・かりもの承知。かりもの分かつても、かりものの理自由分からねば何もならん。

(20・10・12)

#### 【解説】

身上何のおさしづです。病気の快癒を願って、以前から「神に頼む」道を行ってきたが、「いか程思うても」望むように回復しなかつたので、その理由を問われています。

それはなぜか。人間の身の内は神様からのかりものであり、人間は体を神様からお借りして生きていくという「かしまの・かりもの」話を、幾度も聞いて「承知」していても、「かり

もの理自由」「この理」、つまり親神の働きを実感するに至らなかつたから神様の働きを得ることができないのだ、と答えられています。

親神様の働きを実感して、それを喜び感謝するということが伴わねば、「何もならん」と諭されます。すなわちこの話は、かしまの・かりものという教理を単に知的に理解するだけではダメで、親神様の働きを「わたしの身上」で証(体証)しなさい、実験をして自らに証明しなさいと指示されているのです。

先人は、このことを、次のように書き記しています。「ほんに、かりものにちがひないと、心にかんじますれば、神の咄の理を、まもることが出来ます。そこでなによのことも、あざやかに心におさまりて、だんくくの行ひがあざやかになりますから、神さまのごしゆ

ごうが、あざやかとなるのでございませす」(諸井政一『改訂・正文遺韻』一七八頁)と述べ、「身上かしまのもの、かりもの。心一つがわがの理。これがをしへのだいでございませす」(同一七四頁)と結んでいます。

#### 【おさしづ全文】

巻一(明治二十年十月十二日

(陰曆八月二十六日)

#### 春野千代腹痛腰子宮痛み伺

いかなる尋ねる処、前々より神に頼む。いか程思うてもいかん。めんく・かりもの承知。かりもの分かつても、かりもの理自由分からねば何もならん。かりもの理で一寸印あれば、ほんにたんのうして、一つ些か、あれは何ばくと思ふ。めんく・消すのじゃで。日々道も同じ事、何にもならんでないで。身上よう発散、よう聞き分けて置け。夫婦身上とは、一つ身の障り、たんのうして通らねばならん。